

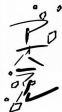


AOHALARYL · R · L ·

#5

SK = unofficial fanbook

With Special Guest
Presented by eGFILE



非公式の二次創作同人誌です。以下の行為は禁止しています。

- ▶無断転載(ネットへのアップロードなど)
- ▶ネットオークションやフリマアプリへの出品・転売





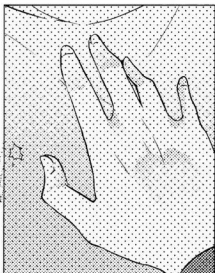


暦のにおい…

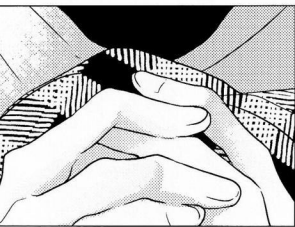


何でもないみたいに

当たり前に
与えられてしまう



何かあげられて
いるのかな









どっちか
ってーと

こっち、かな



暦っ！



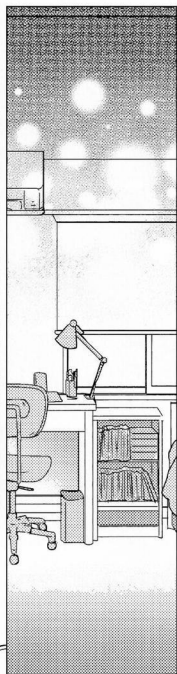
…お前さあ、
何してんだよ











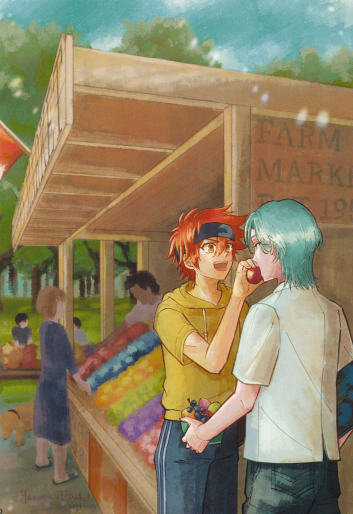






Special Guest











100
Spent
100

パンクーパー発
ジャスパー行きの当列車は

まもなくトンネルを抜け
ウィスラーに到着致します

今度は俺が
先生だね

思い出すな
俺がランガに
スケボー教えた頃

楽しみだな
スノボ!!

こーい
トリマタ
とかなあ……

500

魚に立ち上がる
なよレキ日

100

$T_4 T_2 = 1$



白い雪



今も目に
焼き付いて
離れない



盾！

盾ってば！

すっげー…
綺麗だ…

だから危ない
って言った…
痛い…

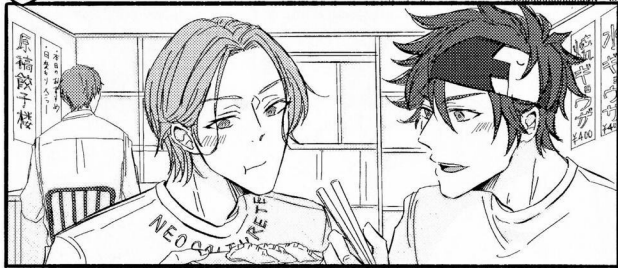
ゴメンって…
① し

雪、そんなに
好きなの？

かみぎみんから
ずっとならなうわ

…







一緒に滑れるんなら

別にどっかっていいんだよ



ランガー！この前やってたトリックを見せてよ

えっランガくん？！

あっランガだ



…暦

あ、逃げたく待ってよランガー

うん

この辺まで来れば大丈夫じゃねえ？



暦！



それにしても
お前人気者
だよなあ

……うれしく
ない……

すっぴん
ギャルに……



暦のところに
帰りたい



早く沖縄に
帰りたい

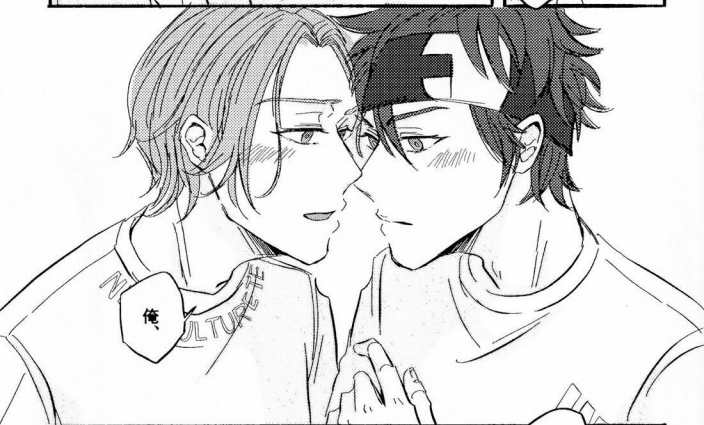


俺は、
お前のこと
待たねえから

俺が待つんじゃ
なくて

俺がお前の隣に
行くんだよ

えっ



待ってるから

☆ まあ、
そうなんだよ

諦めて
やらねえよ







Post
Specialist
1/2

『誘い文句』







……
暦は嫌なの？

ニム



暦と寝るの、
旅行以来？

寝るって
さあ……

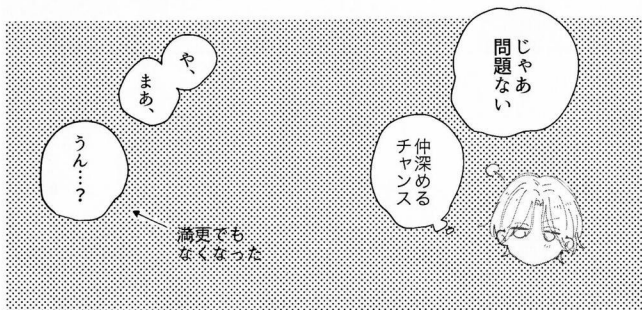
お前ホントに
どういう意味か……



いや、

ニム

とかじゃ
ねえけど
……っ！



じゃあ
問題ない

仲深める
チャンス

満更でも
なくなった

や、

まあ、

うん……？

スケボー界の新星
馳河ランガに迫る

スケート
ボード界に
突如現れた新星

その眉目秀麗な
顔立ちから
ファンの間では
プリンスと呼ばれており



まあまあ
テレビにまで
出るように
なっちゃって

相変わらず
何事もない
わかんない
してるけど

えっ
もしかして
ランガって
未だにお前のボード
使ってるの？



未だにどころか
アイツ俺のボードしか
使わないんですよ

市販のボード
試してはいる
みたいなんすけど
どうもしっくり
こないみたいで

ってお前また
夜ふかしたのか

タマが
すごいぞ

あいつ
まうた
ボード壊し
たんすよ

今日の
インタビューに
絶対持つて行きたい
って言うから
徹夜で修理しなきゃで



このボードも
磨がイチから
木を削り出して
作ってくれたんです

磨はいつも
俺のクセを見抜いて
最良のボードを
作ってくれる

磨が作った
ボードだから
俺はどんなに
難しい技でも
悪路でも挑戦する
ことができます

...

その：
所感
は私の

アスリート
たといそれ
個人競技が
スポーツだとして
で一人でも
きまません

この選手を
勝たせたいと
強い意志を持
信頼できる協
力者ならば
側記にない
越えられない
壁はあります

そういう意味で
馳河選手は
アスリートとして
大切な出会いを
経験されたんですね

!!!

はい！

ランガ あああ

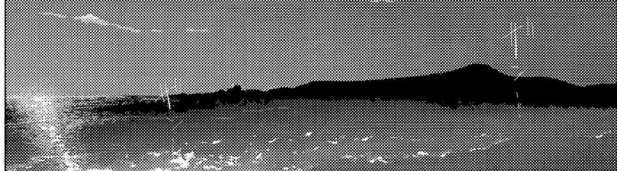


人生はじめて合同本に
参加させていただきました！
貴重な機会をありがとうございました！

追伸
好きなことを「好きだ」って胸を張って言える。
それがどんなに素晴らしいことかを教えてくれる
アニメでした！
二期も楽しみです…！！



スペース ああ
2期も多読みたい



.....あ
うちに来てて
泊まってくことに
なったんだって

ぐっすり
寝てんなー

ランガ

ベッドで
寝ようぜ

おい
ランガ

コ

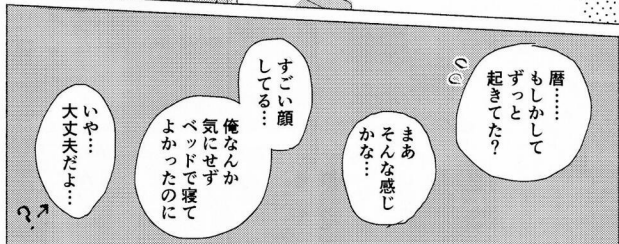
テ

あれ

なんか急に

んっ...





END

消えない雪を知っている

コシュン

夢を見ていた。

踏みしめた板に体を預けるときのバランスとすごいスピードで流れていく景色。そこまでは知ってるけど足から伝わる振動はいつものアスファルトより静かでやわらかくて、目の前に広がる地平はこの世で一番じゃないかと思って思うくらい白い。実際にその上を滑る感覚を知ってるわけじゃないけど、これは。

(……雪)

そう思った途端に息が白くなって呼吸をするそばから後ろに流されていく。夜なのか空は暗くて、静かな世界はきれいだけど少し寂しい。

「う、わっ」

唐突に足元のボードが消えた。思わず声が出たけど体は投げ出されることもなく、気がつけば俺は白い平原に一人立ち尽くしていた。

(どうしよ)

夢なのは分かっているけど目が覚める気配はなくて、とりあえず歩いてみることにする。本物を知らないからなのか実際にそうなのか踏み雪の感触はふわふわと頼りない。

(静かだな)

しばらく真つ白な世界で歩き続けて、なんで歩き始めたのか分からなくなってきた頃。空に何か光るものが見えた。それに気づいた瞬間輝きが強くなり、ここまで伝わる熱に強張ってた体が緩むのが分かる。寒いとは思わなかったけどもしかしたら凍えてたんだらうか。

(あそこに行きたい)

熱く眩しく輝いて俺を待っているもの。遠くで光るそれに手を伸ばそうとした時、どこからか俺を呼ぶ声が聞こえた。もうちょっと待ってほしい、あと少しで届くんのだ。あと少しで、

「喜屋武!!」

「ふあいつ!……へっ?」

大声で呼ばれて一瞬で意識が覚醒する。気が付けば俺は自分の席から勢いよく立ちあがり、呆れた顔の先生と見つめ合っているところだった。数秒静まり返ってから爆笑の渦に包まれる教室。先生のため息に小さくなりながらランガの方をちらつと見ると。

「……………むにゃ」

「……………」

お前も寝てるのかよ。

屋上で昼メシを食いながら、俺は向かいに座るランガの顔を何となくながめてみた。居眠りでリフレッシュしたのかやたらすっきりした表情で、食いもんを詰め込んだ口がハムスターみたいになってなけりやきれいな顔なんだろう、多分なんも考えてないけど。俺には分かる。ぼーっとそんなことを考えてたら平和で気の抜ける光景のせいかな、ふと思考がさっきの夢にジャンプした。

一応あれも平和って言えるだらう、静かできれいな世界。実際には経験のない「雪の上を滑る」から俺が連想する人間は一人しかいなくて、考えるよりも先にその一人に向かって口が動いた。

「なあ、雪の上滑るってどんな感じ?」

「？」

(あ)

しまった。

きょんとした顔になるランガを見て心の中で顔をしかめる。何でもないって言うかと思っただけ、ランガの方が早かった。

「スノボのこと？」

「……あー、うん」

あいまいに頷くと親友はちよつと首を傾げた。

「似てることもあるけど、やっぱりちよつと違うかな。バインディングも……暦はもう知ってるか」

「ん、そっか」

歯切れの悪い俺に不思議そうな顔をしてるランガが視界の端に映ってるけど、ちよつとそつちを見づらい。

(またスノボしたくなる時あんのかな)

浮かび上がってきた問いは声になる前に胸にしまう。そもそもさっきの質問もするべきじゃなかったんだ。スノボ、雪、故郷。その話をすれば当然ランガの親父さんに意識が向いてるだろう。聞かれて怒るとは思わないけど、今ここで思ひ出させる必要もないことだった。考えすぎならその方がいいけど、さっきの夢ちよつと寂しかったし。

(話題変えるか)

「なあ、」

「スノボもしたいな。いつかまた」

「！」

心の中で謝りながら岡店長の失敗談を暴露しようとして聞こえてきた、心を読んだような言葉に肩がびくつと跳ねる。上目遣いでランガを見るとそれに気づかない親友は少し遠くを見るような目をしていた。

「父さんが好きで、父さんが教えてくれたスノボが好きで、ずっと雪の上を滑ってきて。息をするのと同じくらい俺の一部になって……でも父さんが」

ランガはそこで少し黙り、小さな声で「いなくなつて」と続けた。

「それまでどうして滑ってたのか、どうやって楽しんだのかも分からなくなつて。もう滑る意味なんかないって思ってたのかも」

「それは」

思ひ出させちゃまった。傷つけた。俺が余計なこと言つたから。独り言みたいな声が苦しくて、とにかく何か言わなきゃと息を吸う。と。

「でもそうじゃなかった」

はつと顔を上げればランガが俺を見ていた。怯みそうなくらい真つすぐに。

「スノボから降りて歩いた先に、暦がいた」

「……………」

さっきまで耳に届いてたはずの昼休みのざわめきが聞こえない。今俺はどんな顔をしてるんだろう。うまく息ができなくてぎゅつと手を握って、それでも耳は一言も聞き逃すまいと全力でランガの声に集中してる。

「暦が作ってくれたボードで色んな所に行つて、色んな人と出会つて。できなかったことができるようになるのが楽しくて……気づいたんだ。父さんが教えてくれたことも母さんとここに来たことも全部が俺をここまで連れて来て、今こゝうして暦と一緒にいる俺にしてくれた」

風の代わりに穏やかな声だけが俺とランガの間を流れていく。

(……今)

大事なことを言われてる気がする。俺が知リたかったことや言われたいこと、そういうのが目一杯詰め込まれた言葉を。

「俺は今でもスノボが好きだよ。雪もスケボーも、暦が教えてくれた色んな事も全部」

日が差したみたいな笑顔に、もしかしたら見とれていたのかもしれない。黙ったままの俺にランガが不思議そうな表情になる。

「暦？」

太陽に照らされた目はいつもより明るく光ってて、まつ毛の影が落ちた部分とのコントラストは沖繩の海を連想させた。

(……キレーだな)

今度ボードを作る時はもっと冒険した色にするのもいいかもしれない。太陽の黄色、滾る血の赤、若葉の緑。どうすればこの美しい色が引き立つだろう。

「暦ってば」

(れ、き)

ちょっと焦れたみたいに呼ばれても返事をせずに心の中で二つの音を反芻する。ランガにそう呼ばれるのが好きだ、他の誰とも違う抑揚で俺を呼ぶその声。胸がぎゅっとして何だかじゅっとしていられない。ちょっと前までこんな気持ちなんて想像もしたことがなかったのに。

「俺さ。ランガに……」

何か言わなきゃと口を開いたけどすぐ言葉に詰まってちよつとうつむく。どこかにためらいがあるのは、ランガと出会って知ったのが明るい気持ちだけじゃないからかもしれない。

(お前に会うまで)

スケボーが大好きで割と面倒見がよくて明るくて、あんまり悩んだりしない。自分のことをそういう人間だと思ってた。仲間を失う恐怖は知ってても、俺自身がスケボーから手を離す瞬間なんて想像もしたことがなかったんだ。

言い訳だ。努力すればきつと。そう自分を騙せないくらの、愛抱夢に言われるまでもない圧倒的な『才能』の差。眩しく輝くそれに照らし出された醜い感情のままランガやミヤに八つ当たりをして、自己嫌悪でますますどこにも行けなくなつて。今思い出すだけでも枕に顔を埋めて暴れたくなるようなみつともなさだけど、結局はその全部の根っこにランガの滑りへの確かな憧れがある。

(自分でも知らなかった俺を、お前が)

痛いほどの羨望と隣にいらなくなる不安。心がぐちゃぐちゃになるのも感情を抑えられないのも、スケボーが好きでランガの滑りが好きで、ずつとお前と滑っていたいからだ。だから遠くに感じてしまうことがないと言えば嘘になるけど、それでも一番伝えたいのは。

「俺……お前といると楽しいんだ」

「うん」

唐突な言葉に、それでもランガは嬉しそうに頷いてくれる。

「楽しくてもっと滑りたくなって……だから」

二人でいれば毎日がきらきら光って見えるのに、言葉にするとこの気持ちの半分もうまく伝えられない気がして今度こそ黙り込む。そんな俺をしばらく見つめていたランガはふと上を向いた。

「暦にも見せたいな。いつか」

「？」

何を、と聞くより早く、見上げてた空を切り取ったみたいな目がこつちを見て笑う。

「俺が育った場所。唇が教えてくれたみたいに、今度は俺がスノボ教えた色んなところを案内して。そうやって唇がくれたものを、俺も唇にあげたい」

宝物を見せるような、それでいて何でもないような言い方で渡された言葉たちに何だか泣きたくなる。ランガが俺を変えたように、俺もランガを変えたんだろうか。一緒にいて感じるこのどうしようもない眩しさをお前も知っていてくれるなら。

「……俺沖縄出たことないんだけど」

胸がいつぱいすぎて口から出てきたのはそんな言葉で、もっと他に言うことがあった気がしてヘアバンドを引っばる。それを見たランガはなぜか嬉しそうにこつちに身を乗り出した。

「じゃあ、初めてだ」

「え？」

「俺の最初のスケボーとビーチは唇と一緒にだったから、唇の最初のスノボと雪は俺と一緒に。どう？」

「……どうってなあ……」

別に恥ずかしいことを言われたわけじゃないのに顔が熱くなってく。照れくさくてランガの顔を軽く押しのければやわらかい感触で唇に触ったのが分かる。それに焦って、こんなことに焦る日が来るのも想像してなかったなと思った瞬間、指でそっと自分の唇に触れるランガが目映った。

(あ)

触りたい。

その先のことなんて全然考えてない、ただそれだけの衝動に突き飛ばされて手を伸ばす。いきなり手首をつかまれたランガはびっくりした表情になり、俺の目の中に何を見たのかちよつと固まってから困ったような顔を向いた。髪の隙間からのぞく耳は赤く、唇がかすかに開いてまた閉じるのが見えて指に力が入りそうになる。俺たちが今までにした恋人らしいことといえば「手をつなぐ」だけで手を伸ばした瞬間は本当に、誓ってその先のこと何にも考えてなかった。なかったんだけどこれは。

(しいい、んだよね)

それが聞こえたみたいに手の甲にランガの指がそつと触れて、そこから頭までびりびりと電流が走るような感覚がした。うるさい心臓を無視してつかんだ手をそつと引き寄せる。ランガは何も言わずこつちに体を傾け、バランスを崩す前に俺の膝に軽く手をついた。まだこういう空気には全然慣れなくてお互いの表情をうかがうことすら出来ない。それでも何とか二人の目が合いかけた時。

高らかに予鈴が鳴った。

「……………」

「……………」

チャイムの響きが消えるまで二人して黙り込む。何でよりによってこのタイミングなんだ、成功してたらこゝまで恥ずかしくなかったのに。いや別ベクトルの恥ずかしさはあったかもしれないけど。目を見られないまま手を離せば、俺がつかんでた部分をそつと撫でる指が見えてまたちよつと体温が上がった。落ちて着こうとしてか一度深呼吸したランガがいつもより小さい声でささやく。

「チャイム鳴ったね」

「う……」

「教室行かなきゃ」

「で、でも俺まだ半分しか食ってないしお前も、つてあれ!」

やっぱり向こうも気恥ずかしいのか早口で言いながら立ち上がるランガ。往生際が悪いのは分かっているけど、なんとかここにいる時間を引き伸ばしたくて苦し紛れに指差した昼メシを思わず二度見する。

「ランガお前いつの間に食い終わってたんだよ」

「はじめに暦がぼーっとしてる間」

「お前に言われるくらいぼーっとしてたの……?」

「うん」

せつかくのいい雰囲気がぶち壊されたうえに地味にシヨックなこの指摘。しかももう割と冷静になつてゐるし。思わず肩を落とすけど、笑つてゐるランガを見てたらこつちもつられて笑い出してしまふ。

「ま、いいか」

扉に向かって歩き始める背中を追って立ち上がる。そうだ、別に今日じゃなくたっていい。俺たちの前には長い長い道があつて、色んな初めてを重ねていける。それはこいつとの出会いみたい想像もできないような出来事で、その全てがそれぞれの形で俺たちを変えていくだろう。俺と一緒にいて変わっていく自分をランガは好きでいてくれるだろうか。

（そうだいいな）

「……お前の故郷行ったらさ! 雪合戦してみたいんだよな! かまくらと雪だるまも作つて、あと雪にシロップかけて食いたい!」

でもやっぱりちょっと悔しいから、思いつくままやりたいことを並べ立てれば振り返らないランガの笑い声が聞こえる。本気で言つてただけだな。

（雪、か）

遥か遠いお前の故郷。その空もランガみたいな色をしてるんだろうか。俺はきつとその色もそこから降る雪も一目で好きになる。夢の中の景色は少し寂しかったけど、実は雪と聞いて真つ先に思い浮かべるのは寂しくも冷たくもない光景だ。だってこの先どこに行つても何を見ても、俺が初めて見た雪は。先に行く背中に向かって大きく息を吸う。

「ランガ!」

振り返つた笑顔は、初めて会つた時より日に焼けていた。

共に、君と

鳴宮

* * *

寝起きのぼんやりとした視界に映ったのは、見慣れた自室の天井ではなく小綺麗なマンションのそれだった。ロールカーテンで仕切られた窓の外はすでに明るく、とうに日が昇っていると知れた。

ランガの母が夜勤でない日を選んで泊まりにきて——夜を共にするようになって、何度目の朝だろう。ランガはいつも暦より先に起き、母親の分も含めて朝食を作る。簡単なものしか作れない、と本人は言うけれど、暦からみればたいした孝行息子だ。

ふわ、とあくびをしながら暦はベッドの上から腕を伸ばしてカーテンを開けた。必要最低限の家具が備えられた、よく言えば機能的、有り体に言えば殺風景な部屋に光が射す。インテリアらしきものといえ、机上の家族写真と、暦があげたシーサー人形くらいだ。

「……………」

シンプルにまとめられたランガの部屋の中、暦お手製のシーサー人形は明らかに異質で、なんだかこそばゆい。彼のプライベートな空間に、自分が入り込むことを許されたような感じがして——まるでカッブルみたいだ。

（つてか、実際付き合ってたんだよね……俺たち）

ランガのベッドの上であぐらをかき、扉の脇のラックに並べられた二体のシーサーを眺めながら暦は今さらのように思う。

数ヶ月前の自分が知ったら驚く、というよりそもそも信じようとしないう。う。「あの日」までは本当に、自分とランガの関係がこんな展開を迎えることになるなんて、思いもしなかった——。

「俺、暦のことと知りたいたい」

いつものようにランガと待ち合わせて登校し、授業そっちのけでボードの改良について熟考を重ね、普段どおりに迎えた昼休み。早々に弁当を食べ終え、屋上でスケートの動画を一緒に眺めながらトリックの解説していると、突然ランガがそう切り出した。

唐突な一言に暦は面食らう。ランガはランガなりに思考を巡らせているのだろうが、いかんせん結論だけをポンツと口に出すので、聞かされる身としては脈絡のない台詞に戸惑ってしまう。

「何が知りたいんだ？ なんでも——いや、答えられることなら答えるぞ」

以前質問責めにされたことを思い出しながら予防線を張っておくと、ランガはそうじゃない、と首を振る。雪のような白銀の髪がさらりと揺れ、太陽の光を受けてきらめく。

「暦は俺じゃ思いつかないようなアイディアにあふれてて、話を聞きたびにワクワクする。暦は俺の世界をどんどん広げてくれる。だからもつと俺の知らない話をしてほしい、俺の知らない暦を教えてほしいんだ」

「つ……そ、そうか」

なんのてらいもない言葉に暦はたじろいだ。こどもストレートに気持ちをぶつけられると照れくさく、返す言葉に困ってしまう。

暦は落ち着きなくスマートフォン画面に視線を落とし、動画を物色する体を装いつつ口を開いた。

「まあ、こうしてつるんでいやでもわかってくるんじゃないの？」

「うん。俺、暦ともっと一緒にいたいな」

「なんだよそれ、『付き合っつて』って口説いてるみてーに聞こえるぞ」

暦としては気恥ずかしさをまぎらわすための軽口のもりだった。が、暦の言葉にランガは我が意を得たりとばかりに俄然勢いづいた。

「そっか、そうだ。うん、暦、俺と付き合おう」

「はあ!？」

想像の斜め上をいく台詞に、暦は危うくスマホを取り落としそうになった。こいつは意味がわかってるのか、もしかして日本語を間違えたんじゃないかとランガの顔を仰ぎ見るが、青い瞳は至って真剣だ。

「俺、暦のこと好きだし。暦は？」

「いや、俺は好きとかそんな……まあ、お前と一緒にいるのは楽しいけど……」視線をそらしながらしどろもどろに答えると、ランガはずい、と顔を寄せてきた。

「なら、付き合おう」

「おい、なんで今でそうなるんだ？」

「だって暦は日本人だから、『好き』って言うのが恥ずかしいだけなんだろ」

「おっまえ、こんなときだけ都合のいい解釈して——」

「ほら、嫌とか違うとかはつきり言わないし。——暦」

* *

結局ランガに押し切られて付き合うことになり、流れに流されて身体の関係まで持つてしまった。

しかし今、改めて付き合うきっかけになった時のことを思い出すと、もっと知りたい、一緒にいたい、なら付き合おう——という流れだったのに、こうも簡単に身体を重ねてしまつてよかったのだろうか。

(まあ確かに、今まで知らなかったランガの顔も見たけど)

『暦、気持ちいい？ 俺も……』

『あ……今の暦の顔、好き……っ』

「——っ」

不意に昨夜の情事が脳裏によみがえり、暦はひとり赤面してぐしゃぐしゃと髪をかき混ぜる。と、部屋の扉が開いてランガが顔をのぞかせた。

「暦、おはよう。……すっごい寝ぐせ」

「ハ、ハハ……おはよ」

暦は目をこするふりで顔を隠しながら、もう一方の手で乱れた髪を撫でつける。幸いランガは跳ねた赤毛に気を取られ、暦の表情には気づいていないようだ。

「朝ごはんできたよ」

「サンキュ、すぐ行く。あ、シート替えるだろ？ メシの前に洗濯機に——」

このままごまかしてしまおうと、暦はベッドを降りるとランガに背を向け、シートをはがしにかかる。しかし途中でランガの手が肩に触れた。

「ん？ 何——」

手を止めて振り返ると、ランガの整った顔が思いのほか目前に迫っていた。驚いて身を引こうとするが、それより早くランガの手に肩を引き寄せられ、そのま

ま唇を塞がれる。

「……………」

柔らかく触れて、すぐに離れる軽いキス。驚きはしたが、ああランガはカナダ育ちだし、挨拶みたいな感覚なのかな……と唇は一瞬気を抜く。

すると止められなかったことを良いようにとらえたのか、ランガは唇の唇をべろりとひと紙めし、さらには唇の隙間を舌先でつついてくる。唇は慌ててランガの身体を押し返した。

「……ッ、なに朝から盛ってんだよ」

「ダメ？」

「いや、だって、こーゆーのは夜するモンだろ」

「じゃあ『おはようのキス』ならいい？」

「——それもダメ！ 日本人ってのはなあ、なんつーんだ、こう、慎重深くて……」

「……やっぱり唇って難しい」

ランガは唇の言動が不可解だと言わんばかりに首をひねる。それはこっちの台詞だ、と喉から出かかったが、唇はこの状況から抜け出す方を優先することにした。

「いいから、早くメシ食おうぜ！ 腹減ったろ？」

まるで唇の言葉が呼び水となったように、タイミングよくぐう、とランガの腹の虫が鳴った。うまくいった、と唇が内心ホッとした途端——。

「うん。昨日『運動』したからベコベコだ」

「おまっ……」

意味深な言葉に唇は絶句するが、ランガはどこ吹く風だ。動揺する唇をよそに、涼しい顔でシートを回収するとスタスタと部屋を出ていく。はああ、と盛大

に息をついて唇は額を押さえた。

ランガのスケートは常に唇の想像を超えてきて、度肝を抜かれてばかりだが、ランガ自身の言動にも色々な意味で驚かされる。

クールに見えて案外何も考えていなかったり、普段は口数が少なくせに恥ずかしいくらいまっすぐな台詞に限って饒舌になったり。

付き合っていくうちにもっと様々な一面を知って、驚くことも少なくなっていくのだろうか。

(……想像できねー)

いつまで経ってもランガの言動は予測できず、振り回され続けそうな予感しかない。

でもそれはそれで面白いのか、と唇は思い、ラックの上に鎮座するシーサー人形を軽くつつくとランガの後を追いついてリビングへ向かった。

luck

きりやま

『——それでは、次のコーナーです。本日の無限大占い!』

「あ!始まった!!」

テレビから流れる声が、滑らかに原稿を読み上げるものから元気いっぱいのもので愛らしいものと変わる。いつも通りの朝食を囲む食卓に、いつもより少しばかり元気が良い月日。どうやら最近ハマっている占いコーナーが始まったようだ。きらきらとした目を画面に向けているのを感じながら、食事を口へと運んでいく。

『本日一番ラッキーなのは……しし座の貴方!大きなトラブルもなく、趣味の調子もバッチリ!ラッキーアイテムは缶ジュースです。それでは、無限大に良い一日を!』

特に意識せずとも、自身に当てはまるものというのは耳が勝手に拾うもので。しかも一番、ときたら、悪い気はしない。きちんと確認する気もなかった内容を何とはなしに記憶していく。趣味はバッチリ。ラッキーなのは缶ジュース。

「お兄ちゃん一番じゃん!いいなあ」

「たかが占いだろ?まあラッキーなのは悪い気しないけど」

「これ、すつこく当たるんだよ!いいことあったら教えてね」

「わかったわかった」

妬ましそうな視線を向けてくる月日を宥めながら、咀嚼していたものを嚥下して、ごちそうさま、と手を合わせて。鞆を引つ掴み、ボードと一緒に駆けだす。
「行ってきます!」

軽快な音を立ててウィールが地面を撫でていく。暫くすればいつもの場所、いつもの顔がそこで待っている。軽く拳を突合せて、おはよう、と言葉を交わす。これまたいつも通り学校へと向かう途中、無意識に自販機が目止まり、ボードを蹴る足がゆるやかになる。

「暦、どうしたの?」

「いや……今日さ、占いで一番だったんだけど、缶ジュースがラッキーアイテムだっつて。気になっちゃって」

「そうなんだ。買ってた?」

「折角だし何か買うかあ」

硬貨を入れると、機体が金属質な音を立ててそれを飲み込んでいく。適当に選んでボタンを押すと、ビビビ……と音を立てて備え付けの液晶に数字が表示されて、ひとつ、ふたつ……と、眺めている間に同じ数字が綺麗に揃っていく。暫くするとファンファアレのような音が鳴り響き、続いてガシャン、と音がして2本目の缶が落ちてくる。

「お」

「すごい!当たりだ!」

「こういうのって本当に当たるんだな……」

目を丸くしているランガを横目に、あの占い、マジなのかも……と思いつながらそれを取り出す。見れば、派手な配色のパッケージに、新発売！言葉では言い表せない新感覚飲料！という派手なシールが貼ってある。

「なにこれ。知ってる？」

「いや、見たことない。新商品って書いてあるし」

「ふーん。2本もいらないし、これやるよ」

「いいの？」

「感想聞かせてくれよな」

「わかった」

「やば、思ったより時間食った」

「わ、ほんとだ。急ごう」

大きく頷いて、再度ボードに飛び乗って地面を蹴る。ギリギリのところでは始業のベルには滑りこめなかったが、先生がちよっと遅れていたお陰で事なきを得た。やっぱツイてる。

それからはいつも通りに授業を受けて、お昼になって。昼飯を食うついでに朝買ったままだった缶ジュースを開けることにする。爽やかな味を、ごくごく、と音を鳴らして飲み込む。ランガの方を見れば、例の新商品とやらは結構強烈な味がしたみたいで、一瞬顔をしかめている。

「Zesty」

「んん？なに？」

「刺激的な味！……でも癖になるかも」

「へえ、気になる。ひとくち」

そう言って手を伸ばすも、余程気にいったのか一気に飲み干してしまったようで間に合わなかった。いや一気飲みって。

「ああ！あげるって言ったけど！せめて一口くらいー！」

「もうっ」

どこから出したのか更に出てきたパンを頬張りながらも「も」ことしているランガを恨みがましい目で見やる。多分ごめん、って言ってる気がするけど、いや、口の中のものなくなったタイミングで言えよ。

「ごめん……でも気が付いたら全部飲んじゃってたんだよね……」

「ん？」

目の前のランガは相変わらず口いっぱいには食べ物詰めて込んで咀嚼している。——じゃあ今聞こえたのは？とても口の中に物が入ってる人間の声じゃなかった。でも確かに声はランガのそれで。

「今何か言ったか？」

「も」

首を振るランガの姿にこちらも首を傾げるしかない。空耳か?と思ったのも束の間。

(暦は今日もかっこいいなあ)

「……」

聞き間違いじゃ、ない。

はつきりと、耳からじゃなくて頭の中に直接響くように声が聞こえてくる。

え、なに、どういうこと? 喋ってないよな!と目を白黒させていると、ようやく食べ終わったのかランガが怪訝な顔で見てくる。

「……暦、大丈夫?」

「あー、ああ、うん、大丈夫。何でもない。何でもない」

「んん? 変なの」

(どうしたんだろ、お腹でも痛いのかな……)

相変わらずはつきりと聞こえてくる声に、俺は頭を抱えるしかなかった。

午後の授業は——いつも真剣に聞いているかと言われたらそうではないが——

散々だった。なんとなく視線を感じればランガがこっちを見ていて、いつもなら何でもなしに脳内でハッキリと副音声みたいなものが聞こえてくる。耳からの声は勿論そのまま聞こえるわけで。授業に集中するどころか、うっかり脳内の声に答えてしまいそうで変な汗をかく羽目になった。

(さっさと授業終わらないかな)

(こないだ練習したやつ、今日こそ上手くいくかな)

(早く滑りたい)

(一緒に滑りたい)

(暦と二人で)

途中から考えることは諦めて、逆に脳内の声に集中することにしてみる。元々感情表現はストレートなやつだけど、でも、喋ってない間もこんなに考えてたのか……と、驚いたのも最初だけで、後から後から押し寄せるそれに、自ずと顔に熱が集まるのを感じる。いつもだって告白みたいに熱烈なのに。本当にこいつは裏表がなくて、俺と一緒にいるのが楽しくて、俺のことが、

(やっぱり、好きだなあ)

ガタツと音をたてて教科書を落としてしまう。

「こら、喜屋武、居眠りか?」

「すみません……」

——今、何て言った？いや、言っていないんだけど。だけど！

思わずランガの方を見れば心配するような目線とかち合い、気まずくて思わず目を逸らしてしまう。どんな顔すればいいんだ。っていうか、さっきのってどういう意味なんだ？好き？スケートが？いや、そうだよな、そう。スケートの話だ。俺だって大好きだし。スケートも。……ランガのことも。

(唇、大丈夫かな……心配)

聞こえてきた声に、目を逸らした罪悪感が頭をもたげる。一度深呼吸をして、出来る限り笑顔を作ってランガの方を見ると、安心したように笑うのが見える。それに胸をなでおろしたのも束の間。

(俺の好きが友達の好きじゃないってバレても、このままでいられますように)

——そうして俺は、再び教科書を落とす羽目になるのだった。

放課後。

耳から聞こえる声と、頭に響く声でおかしくなりそうになりながら、それでもやっぱり滑りには行きたくて。でもこれ以上不安にさせないようにという気持ちで、出来るだけ人気がないところを提案した。何が原因かは分からないけど、今日突然こんなことになったんだし、多分そのうち治るだろうという期待を込

めて。せめて出来るだけ自然に。滑ってれば気にならなくなる。きっと。——結果、思っていた通りに、滑り始めればそんなことは杞憂だった。むしろいつもより滑りやすいくらいで。いつもどれだけ真剣に、でも楽しんで滑っているのかを再確認するだけ。ランガが思っていること、自分が思っていること。驚くほど共鳴するような感覚は、いつも通り、よりもちよつとだけクリアに感じた。

(楽しい！)

俺も、と呟いて空を舞う。

別に些細なことだ。ランガは元から、嘘をつくようなやつでもない。些細なことなんだ。ちよつとズルしてるみたいな気持ちにはなるけど、でも俺だって同じことを思っているのだから。伝えればいいだけ。

「なあ」

「何？」

「俺さ……やっぱ、何でもない」

「ええ？変な唇」

もう一步の勇気が出ずに、ぐつと言葉を飲んでしまう。

下げた視線を再び上げれば、心配そうな目と目が合った。

「ほんとに大丈夫？昼からちよつと変だよ」

「ああ……ううん、大丈夫」

「……何か隠し事、してたりしないよね？」

「あーっ、えっと……サブライズしたいから、ちょっと待ってて」

そう言う、ランガはsing:ingと呟いて嬉しそうにする。どう思うんだろう、と少しの不安を覚えるが、不思議ともう頭の中に声は響いて来なかった。そのことに、逆にホッとする。なんだ、もう聞こえなくなっただんじやん。考えてることが分かるなんて、やっぱズルみたいで良くない。

「楽しみにしてるね」

「おう」

いつかちゃんと、想いは言葉にしよう。伝えられるのが先か、伝えるのが先かは分からないけど。でもきつと、どっちが先でも楽しい。同じことを思ってるのだから。

後日のこと。

例の占いで水瓶座が一番、ラッキーアイテムが缶ジュースなのを見て、仮病を使うか悩むのはまた別の話。

- ▶ 暦ランプチオンリー開催！お祭りだ！となり、
一緒に踊ってくれる大好きな作家様達を巻き込みました。
お忙しい中本当にありがとうございます！
最高の一冊になりました、嬉しい。FUNだしFANです。
各作品へのご感想は是非ご本人またはmoyaまで。
責任もってお届けします。
- ▶ 原作では春～夏が描かれているので、
冬の二人も見たいなぁ～からはじまったお話でした。
沖縄の冬は風が強いと聞いて、
ストールとかマフラーよりネックウォーマーが役立ちそう。
- ▶ OVAもTVアニメ2期もまだまだ楽しいことがたくさんある！
やった～！しばらく踊り続けていると思います。
- ▶ ここまで読んでくださりありがとうございました。
たくさん楽しんでもいただけたら幸いです。

moya



個人の二次創作発行物であり、
公式その他団体とは一切関係がありません。
ご理解のない方の閲覧はご遠慮ください。

R e k i * L a n g a

SK∞ Unofficial Fanbook #05

20221211

eGFILE//moya

🐦 @moya_dd

📠 28423265

yamori@portland.ne.jp

print : STARBOOKS



eGFILE -moya-

青春

2022 winter
SK ∞ UNOFFICIAL FANBOOK